

# 大地

第 47 号  
2014. 9. 15. 発行  
浄 國 寺  
上越市朝3丁目14-10  
☎025-523-5724

## 俳句

山崎 睦

胸深く山気を吸ひて岩清水

夕立や土の匂ひの風生まる

参道に散る夏落葉今日も掃く

木々も又心の癒しとして茂る

一語また一語の重さお講僧

親鸞忌時期の野菜で齋の膳

落葉にも遅速の順序ありにけり

(平成十四年作)

## 住職就任

山崎隆史

私、山崎隆史は、去る六月二十八日、本山・東本願寺にて淨國寺住職に任命されました。八月七日の「孟蘭盆会永代読経および戦争犠牲者追悼法要」で、簡単ではありますが住職就任のごあいさつをすることができました。たいへん多くの方々にお越しいただき、また来られなかった方にもお祝しいただきました。ありがとうございます。

住職になるべく、六月二十六日から二十八日にかけて、護国寺会計の金子一夫さんに行いいただき、京都の本山（東本願寺）で住職修習というものに参加しました。最終日の二十八日には住職任命式が執り行われ、私を含む参加者十九名が新たに住職に任命されました。

住職修習では、いろいろな人がいました。ある人は、元銀行員でした。銀行では、十五歳を過ぎるとごく一部のエリートコースに乗った人を除いて給料が半分になるそうです。そこで、先代住職が高齢なこともあり、五十五歳になったのを機に退職して住職を継ぐ事にしたそうです。

またある人は、お寺で経営している保育園の保育士さんでした。元々他の会社に勤めていたのですが、お寺の娘さんと結婚して婿養

子となり、仕事を辞めてお寺に入りました。二代続けて婿養子で、義父にあたる人も入り婿なので、この義父は普通の会社員で、お寺の仕事にはあまり関わっておらず、先代住職である義祖父が高齢であるため、一代飛ばしてこの方が住職になることになった、という事です。

更にまた別の人は、まだ三十そこそこだったのですが、先代住職が若くして亡くなったため、住職を継ぐことになったそうです。

このように、住職修習の他の参加者に事情を聞くと、先代住職が亡くなった、あるいは高齢になって引き継いだ、という方がほとんどでした。一方当寺の場合、父は元氣一杯ですし、私は未熟者の上に平日は会社勤めをしております。名目上は住職になったものの、まだしばらくは父に頑張ってもらおう事になります。とはいえ、いつまでも甘えてはいられないので、徐々に住職としての責務を果たすようにしたいと思えます。実際に教区（高田教区Ⅱ新潟県上越地方）や組（第六組Ⅱ旧高田市地域）の会合の一部には、私が代表として出席するようになりつつあります。

すべての懸案事項が解決したというわけではありませんが、ひとまず一段落ついたと思います。

門徒の方々には今後もお世話をお掛けすると思いますが、よろしくお願ひします。

## 酒、そして酒

山崎隆昌

他の人にことさら言うことではないが、四月から週一回の休肝日を取っている。

晩酌を何才頃から始めたのか本人もわからない。風邪を引こうが、ギックリ腰になろうが全くかまわず飲む。除雪機で右指二本を落とした夜も、尿路結石で唸っていた夜にも、家族の呆れ顔の中で飲んだ。

現在わが家は、私、妻、長男の三人家族。長男は煙草を吸った。本数は多くないがニコチンの強いピース。喫煙所は台所換気扇の下。

この長男坊が三月の初め静かに宣言した。「いま家にある煙草が無くなったら、私は煙草を止めますよ」

「それは良いことですな」と私はうなずく。しかしそれだけでは終わらなかった。

「ところでお父さん、私が煙草を止めるのと引き換えに、週一回の休肝日を取ってくださいね」と続くではないか。ウムッ！

妻が側から追い打ちをかけるように「それはいいよ、じゃあ四月から始めね」と真面目な顔で嬉しそうに言う。

当方に、反論や弁明の余地などは全く無い「ああ、いいですよ」と答える他はなく、こうして私の休肝日が始まった。

五カ月余り経過したが、特に困ることは無い。酒拔きの夕食もうまいし、眠りも順調、週一回の休肝日にイライラすることも無い。

ところで三十年ほど前、長岡市で開かれた「老人問題セミナー」に参加した時のこと。講師の一人は厚生省の専門官で精神科医師、セミナーも終わり懇親会となる。さらに同じホテルに宿泊する数人で飲んだ。専門官先生もその中の一人。わいわいと話をするうちに

酒の話となりドクトルが述べるに「あのね、精神安定剤として酒はすぐれものですよ。特に難しい処方が必要としないし副作用もありませんからね。ただしですよ適量に飲むことが条件になりますかね」

さすが専門官先生。かの故事にも「酒は百薬の長」と奨めているではないか。(この故事は中国の『漢書』(食貨志)にあるらしい)けれども、この酒飲みの「適量」が、薬の処方と違って難しいのである。一般的には、日本酒で一合程度、ビールで中瓶一本(大瓶ではない)、焼酎(25度)の場合はお湯割りコップ一杯程度と言われている。そのうえに、週二日の休肝日が必要という。

またれよ、かの泉重千代氏は長寿の秘訣を問われ「酒と女かのお」と答え、黒糖焼酎お湯割りの晩酌を、医師から控えるように言われても最後まで欠かさなかったという。

これは例外中の例外としても、酒豪の長命

者は枚挙にいとまがない。何か酒飲みの自己弁護?のようだが。

私の祖父は大酒のみで知られていた。酒、酒、酒の生活であつたらしい。一方で大変エネルギッシュな人で、真宗宗門のため様々に活動したという。その関係で犬飼毅首相から祖父当ての手紙も残されている。その祖父の酒にまつわる歌が面白い。祖父の歌集『願生』より以下三首紹介する

○朝の酒一杯酌みて眺むれば

憂き世はいつも春霞かな

○いかに酒飲みても悲しき盃の

底より涌くかわが悲しみは

○よべの酒まだ醒めやらぬ暁に

腹の酒虫ごろごろと鳴く

祖父は晩年酒で身体を壊し最後は寝たきりに近い状況となり、母が介護に当たった。その母がしみじみと言っていたものだ。

「おじいさんは好い人だったねえ。一度も嫌な思いをさせられたことが無かったもの。私も後一年で、祖父の歳だ。さて、この後酒との付き合いをどれほど続けられることか。



# 掲示板の言葉

山崎隆昌

浄國寺の参道入口脇に照明付きの立派な掲示板が設けられている。十年ほど前長谷川さんご兄弟から、逝去された御両親の名義で御寄進頂いたもの。参道の街灯もそのとき合わせて建てて頂いた。

それ以来この掲示板には、毎月の同朋会、秋の報恩講、参拝旅行等、浄國寺の行事案内やお知らせなどを掲示している。

それに併せて、私がある時に感じた何かの言葉を、模造紙二分の一大に墨書し掲示してきた。言葉は、谷川俊太郎、吉野弘、山頭火や放哉、漱石、良寛、そして曾我量深、金子大栄等々、文章、詩、短歌、俳句、随筆などの中から、たまに自分の言葉を、脈絡もなく、ただ思いつくまま、感じたままに書いてきた。九月の初め、自室の畳に模造紙を揚げ、汗をかきかき新たに書いた。

求めない

加島祥造

ぼくが「求めない」というのは、求めないですむことは求めないって

ことなんだ。

すると  
体のなかにある命が動きだす。  
それは喜びにつながっている。

加島祥造の晩年の詩集『求めない』の中から抜き書きしたもの。

求めない、命が動き、喜びにつながる、と続く言葉に、何か引かれるものがあった。

以前、私がまだ老人ホームの仕事に携わっていた頃のこと、人々が「生活する」とは何かを考えさせられたが、これに通じてくる。

私の中で「人々が生活するとは何か」を、マズローの欲求五段階説を手掛かりに、自なりに考え整理した。

マズローは米国の心理学者で、人間の欲求を、①生理的欲求、②安全の欲求、③所属と愛の欲求、④承認の欲求、⑤自己実現の欲求の五段階の階層で分かりやすく理論化した。

考えた「生活する」とは概略以下の通り  
—生活とは、人々が自らの欲求を実現するためその時その時に行う諸活動の総体である—

私たち人間を含め、生物には欲求があり、それを実現するため体の中にある命が動きだす。この欲求実現活動の総体が「生活することである」と考えたのだ。ここでいう「欲求」と加島の「求める」とは違うのだろうか。

加島祥造は、求めないですむことは求めない

いと、求めないと、体のなかにある命が動きだすと言う。

現代の特質として、求めないですむことを求め過ぎることがある。テレビのコマーシャルや番組も、健康薬や器材、化粧品、車、教材、パチンコ等。求めないですむことばかり。私自身の生活もご多分に洩れずだ。

「求めない」とは、ストイックに我慢することではなく、自らの生活で本当に大切なものだけを求めようということにあらう。大切なものの以外のもを求めないと、体のなかにある命が動きだし、喜びにつながる。

書き終えてポーンとしてみると、妻が部屋に入って来て、書かれたものを黙ってしばらく眺めていた。そして小声で独り言をつぶやく。「解らないなあ。うん、解らない」と

書いた当人は、そのつぶやきを聞きながらそれではまるで一木で鼻括る一ではないか、もう少し何かあるだろうにと思ったが、時間が経つとともに、妻の「解らない」に「そうだよな」と納得する私だ。私にはどうも思い込み、独りよがりになりやすいところがある。

真宗大谷派がお勧めした『宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要』のテーマ「今／いのちが／あなたを／生きている」も難しかった。「解らないことが大切なんだ。そこからまた考える」と誰か言っていたようだけれども。さて、次には何を書こうか困ったものだ。

## ワン公物語⑧



—華のつばやき—

山崎華（慎子代筆）

私は華。パグ犬の雌。七才になった。

母さんが時々「れーん」と呼ぶ。私は（蓮姉ちゃんが帰って来たんだ！）と嬉しくなる。

でもそれは母さんが間違えて、蓮姉ちゃんの名前をすっかり口にしてしまったのだという事に気がついてしまう。そんなことを繰り返して、今ではやっぱり私はひとり残されたのだな、とつくづくさみしい。

母さん達は時々「華にもし妹を連れて来たら、華はどんな反応をするかしらね。これで華がいなくなってしまうたら、相当辛いネ」なんて話している。そしてこうも言っている。「でも今から新しいワン公を迎えても、私達とワン公のどちらが先に逝くか微妙なものね、やっぱり華が最後のワン公ね。」

そこでいつも私の妹の話は終りになる。私も妹なんて要らないよ、と思う。蓮姉ちゃん是我儘な私を受け入れてくれ、私が眠る時はいつもくっついて守られるように眠っていた。あの温もりと安らぎは、蓮姉ちゃんが与えてくれたものだったけれど、私にはあんなふうにはできない。だって私は、ワン公に興味がない。散歩の時も獣医さん所に行った時でも、

どこかのワン公が親しげにしてくれても、煩わしいだけだ。ワン公より人間と遊ぶ方が好きなんだな。たしかにひとり寂しいけれど、ところでこの四月、父さんが休肝日を設け隆ふみ兄さんが禁煙に踏み切った、という話先号に書いたけどまだ覚えてる？

父さんの周りでは結構大きな反響で！の大行進だったらしい。えッあの大酒のみの山崎さんが、という訳だ。

ただ禁煙については母さんの予想に反して意外にも冷静な意見があったんだって。母さんは「偉いネ」「すごいネ」と言われるとばかり思っていたらしいよ。ところが、特に男性の禁煙経験者の人達から「あー、禁煙ね。二月月？それじゃまだまだあてにならないよ。

三月月、六月月、一年位の節目にモーレッツに誘惑にかられるからね。それを越さないよね」母さんは恐る恐る聞いて見る。「隆ふみ、タバコ喫いたくならない？」「大丈夫ですよ、たま〜にお酒を呑んだ時に、ちょっと思いますけどね」今まだ六月月を越えていないし、とは思うもの、母さんには隆ふみ兄さんへの不安は殆どない様子だ。

そして父さんの休肝日も実にしっかり守られてる。休肝日をいちばん忘れてしまうのが母さん。でもそれもまた、マ、イ、カ。

休肝日は二十年前位にも試みたことがあったのだ。その頃は父さんもまだ若く「腕に覚

えあり」状態だったので、不承不承の合意だったらしい。父さんは、お酒のない食卓をどうやり過ごすべきか戸惑っていた。

酒のない休肝日の食卓は無言のまま進み、五分程で済んでしまう。そのため折角の夕食が何だかつまらないものになってしまい、なし崩しに休肝日が解消されたのだった。

それで今回の休肝日設定にあたっては、母さんが父さんにお願いをしたのだ。「お酒がなくても、三分で終わりというのだけはなしにしてくださいね。」

父さんはお酒を呑む時、スポーツか時代劇を見る。たまに興に乗ってあれこれ話もするのだけれど、大体は静かに黙っている方だ。

四月からの休肝日、父さんは随分気をつかって、食事に時間をかけてくれるようになった。そもそも山崎さんチは、母さんがお喋りをしかけないと、大体において静かな家なのだ。隆ふみ兄さんが、たまに「よく喋りますねえ」というと、母さんツンとして「じゃあしばらく黙りますから」「いや、別に良いんですよ、それに大体何分もちますかね」「よーし、黙ります」しかし十分もしないで一言発してしまふ。「あッ」と気づいたとき既に遅しで、父さんも兄さんもニヤニヤ笑うばかり。

以上がわたくし華の、禁煙と休肝に関する中間報告。私には、あまり関係のないような気もするけど、マ、イ、カ。（以下 次号）